

超音波内視鏡検査をご存知ですか？

内科部長 石垣 賀子
(消化器内科・胆膵)



昨年春より当院に赴任しました石垣です。専門は胆膵内視鏡です。今回は、膵臓の新しい検査法である超音波内視鏡（EUS）についてご紹介します。

超音波内視鏡とは？

文字通り内視鏡に超音波装置を伴った内視鏡（図1）で、消化管の中から膵臓などの周囲の臓器の診断を行う検査です。膵腫瘍の早期発見に役立ち、腫瘍があれば針生検をして正確な診断をつけることができます。

昨年夏から当院でも導入され、当院は山口市で唯一この検査を実施可能な専門施設です。

腹部エコーには限界が...

健診で腹部のエコー（超音波）検査を受けている方も多いと思います。しかし膵臓については、体外から超音波を当てるだけでは、膵臓全体を観察することが困難です。膵臓は体の奥にあるため、胃や腸のガスが超音波を遮り死角が生じやすく、また皮下脂肪が厚いと画像が見えにくくなります。腹部エコーで膵癌が発見されることは少なく、拾い上げの工夫が必要です。

早期発見するには？

CTやMR検査を受けることで膵臓全体が見渡せます。それでもミリ単位の小病変は検出されないことが多く、CTやMRで膵管の異常など間接的な所見を拾い上げ、次に超音波内視鏡で精査を行います。

超音波内視鏡検査の実際

先端に超音波装置を伴った超音波内視鏡を口から挿入します。内視鏡を胃内まで挿入し、胃と接している膵臓に超音波を当て観察（図2）します。通常のエコー検査と違い、膵臓全体を調べられ、ミリ単位の病変まで調べられます。

通常の内視鏡に比べて太く、また時間を要するためお薬で眠った状態で行っています。

膵臓の組織採取も可能

腫瘍が見つかったら、内視鏡を通して針を膵臓に刺して吸引し（図3）、組織を取り出します（図4）。これを超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診（EUS-FNA）といいます。細胞の顔つきによって治療方針が異なるため、穿刺して病理診断を行うことが治療方針を決めるのに大事です。

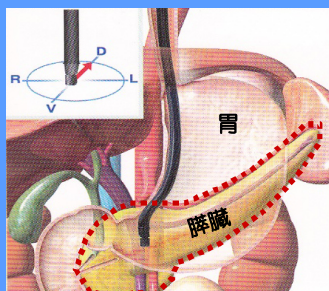
10年前なら開腹術をしなければ組織を採取できなかった膵臓に対して、内視鏡検査で低侵襲に組織を採取し診断できる画期的な方法です。EUS-FNAは2010年に保険適用になり、当院でも最新の超音波装置が導入されたところです。

これからは...

当院では今年4月より「膵がん検診」が始まります。膵臓を詳しく評価するためCT、MRを追加する予定です。ご希望の方は健康増進部（Tel.083-901-6186）までご相談ください。



▲ 図1 超音波内視鏡



▲ 図2 胃の中から超音波を当て、膵臓（赤破線内）を観察します。



▲ 図3 腫瘍に対して針を刺し、組織を採取します



▲ 図4 採取された膵臓組織